

ヨハネによる福音書20章19-31節 「あなたがたを遣わします」

1A 恐れず、遣わされる 19-23

2A 見ないで信じる 24-29

3A 永遠のいのち 30-31

本文

ヨハネによる福音書 20 章を開いてください、私たちは午前礼拝に引き続き、20 章の後半部分を一節ずつ見ていきます。

1A 恐れず、遣わされる 19-23

¹⁹ その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。「平安があなたがたにあるように。」

この週の初めの日には、数多くのことが起こりました。まだ夜が完全に明けておらず、薄暗い時に、マグダラのマリアが墓を見に行ったところから始まります。そこは石が取り除けられていました。それで誰かがイエス様の遺体を持って行ったのだと思い、ペテロとヨハネのところに行き、告げました。それでペテロとヨハネが走ってきて、中をのぞきました。亜麻布と顔をくるまっていた布がそのまま置かれていました。そして自分たちのところに帰って行きます。

そして、その間に女たちが墓に到着しました。そこに御使いがいて、彼女たちが驚きます。「ここに、イエスはおられない。よみがえられたのだ。」と言われます。そして、彼女たちが戻っていくのですが、マグダラのマリアが墓に戻ってきました。彼女は誰かが持って行ったと思って、そこでただ泣くしかなかったのですが、御使いが墓の中にいました。彼女の後ろには、よみがえられた主ご自身がおられました。「マリア」と声をかけると、すぐさま「ラボニ！」と言って、しがみついたのです。イエス様は、「わたしはまだ父のもとに行っていないから、しがみつくのはよして、わたしの兄弟たちのところに、わたしが父のところに戻ると伝えなさい。」と言ったのです。それで、彼女は戻っていき、弟子たちに、「私は主を見た」と告げたのです。

女たちがいますね。彼女たちも、御使いに言われました。「マタ 28:7 イエスは死人の中からよみがえられました。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれます。そこでお会いできます。」これを、弟子たちに伝えに行きなさいと言われます。

そうやって女たちが伝えに行った後に、二人の弟子がエマオに向かっていた。しかし、そこに

もイエス様が歩いてこられて、話に加わり、聖書全体からキリストが苦しみを受けてから栄光に入ることを解き明かされました。主が、パンを裂いている時に、この方が主であると彼らが気づき、エルサレムに戻ります。すると、十一人の弟子は集まっており、ペテロに主が現れていたことを話していました。

そんなこんなで、もう夕方になっていました。弟子たちは、数多くの証言が自分たちのところに集まっていましたが、「ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた」とあります。イエス様が、最後の晩餐の席から、多くのことを語られました。その大きな一つが、「恐れなさいなさい」ということでした。「14:1 あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」彼らは、イエス様がいなくなることで、自分たちは置き去りにされたと感じると分かっておられました。そうではないことを語られました。そして、世が憎むことを語られました。世がイエス様を憎むので、あなたがたも憎むことを語られ、具体的に、会堂から追放され、「16:2 あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。」とも言われました。そして、彼らがそれぞれ散らされて、イエス様を一人残されることも語られました。そして、16章33節で、こういわれたのです。「これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」

イエス様が捕らえられる時に、彼らは逃げましたが、ペテロはアンナスとカヤパ邸の中庭で、「あの人の弟子ではないでしょうね。」と問い質され、ペテロはそれを否定しました。イエス様と一緒にいたということで、弟子たちも命が狙われていたのです。アンナスは、イエス様に「18:19 弟子たちのことや教えについて尋問した。」とあります。そして、マタイによる福音書ですと、祭司長たちは、「28:13 弟子たちが夜やって来て、われわれが眠っている間にイエスを盗んで行った。」ということに、墓の番兵に対して賄賂を払ってそうさせました。ですから、彼らは恐れていたのです。

恐れというのは、私たちの心を蝕みます。アメリカのルーズベルト大統領が、就任演説で、「恐れなければいけないものがあるとしたら、唯一、恐れそのものだ。」と言いました。恐れというものが、最も恐ろしいもので、私たちを委縮させ、麻痺させ、あらゆる悪魔の偽りを信じるようにさせてしまいます。イエス様を信じていきるといことは、自分により頼まないということであり、それは新しい道であり、それだけで不安が出てきます。さらに、世はイエス様を憎んでいますから、イエス様に従おうとするものなら、その憎しみや反対に触れることとなります。恐れや不安は、生きた信仰の中にはつきものなのです。

そして、私たちは弟子たちと同じように、その恐れに対処するために、戸の鍵を閉めるようにします。物理的な手段で恐れていることを回避しようとするのです。しかし、それで恐れがなくなり、安心することはできません。気を付けるということと、恐れることは別です。一度ならず、人々が私に、生命保険などに加入することはクリスチャンとして間違っているのでしょうか？という質問を受け

ました。私は、「正しいことですが、動機が間違ったら、正しくなくなります。」と答えました。将来の人生に責任を持つことは、神の御心です。世において、自分に与えられた財を賢く用いないといけません。聖地旅行に行くにしても、万が一に備えて、旅行保険に加入することを強く勧めました。けれども、もし仮に漠然とした将来の不安から、安心材料として保険加入するなら、「安心の置き場所が、間違っています。あなたの命は、今晚、取られるかもしれません。」と答えます。貪欲な金持ちが、何年も先のために倉を作って、安心しきっていたのと同じ罪を犯します。

将来に対して漠然とした不安があって、不安に駆り立てられて、主の望まれることをするのを控えるならば、それは決してその不安は取り除かれなないということです。神のみが、平安を与えます。そして、イエス様は、そうした物理的な戸を越えて、真ん中にこられてシャロームと言われたのです。イエス様は、物理的な壁でも取り除けない恐れを、取り除いてくださいます。

ところで、イエス様が、戸を越えて入ってこられているということに注目したいと思います。先の、頭を包んでいた布と、亜麻布と一緒にいなかったということから、イエス様の体はその布を通り抜けたという感触を受けます。つまり、物理的な障壁を越えられるものなのです。ところが、肉体は、はっきりと持っていて、ルカ 24 章では、焼いた魚を食べておられ、これから、手と脇腹を示されます。主の復活の体は、幽霊のようなものではないし、また今の肉体とも異なり、物理的障害を越えるものであります。ここに、私たちの信仰が生きたものとなります。私たちの希望は、決して心の中で思い描いた、実体のないものではないのです。主が生きておられるのは事実なのです。しかし、物理的なものに制約されないのです。

²⁰ こう言って、イエスは手と脇腹を彼らに示された。弟子たちは主を見て喜んだ。

弟子たちはどれほど、喜んだでしょうか！ ガリラヤに主がおられる時に、この方の栄光を眺めていました。すべてを捨てて、この方に従い、いのちの言葉をずっと聞いてきました。エルサレムに近づいたら、それこそローマではなく、神の国を打ち立てて、世界に神の国が広がると思っていました。それなのに、十字架に付けられてしまったのです。ところが、です。今、ローマを倒すよりも、もっと大きな、神の全能の力を見たのです。死に打ち勝ったのです。つまり、彼らの神の国の到来の希望は、潰えてしまったのではなく、むしろ強化されたのです。人々の罪のために主は死なれ、それが完了したことを復活によって現わし、正義と平和に満ちた御国を打ち立てるために再び戻ってきてくださいます。

主は弟子たちに前もって語っておられました。「16:20-22 まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜びます。あなたがたは悲しみます。しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。女は子を産むとき、苦しみます。自分の時が来たからです。しかし、子を産んでしまうと、一人の人が世に生まれた喜びのために、その激しい痛みをもう覚えて

いません。あなたがたも今は悲しんでいます。しかし、わたしは再びあなたがたに会います。そして、あなたがたの心は喜びに満たされます。その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。」この喜びは、取りさられるものではありません。悲しみがありましたが、その悲しみがそのまま喜びに変わりました。十字架は敗北ではなく、むしろ勝利なのだということが、復活によって明らかにされました。もうだれも、この喜びを奪い去るものはありません。

²¹ イエスは再び彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

主は再び、「平安があなたがたにあるように」と言われています。先に語られた時に、手と脇腹をお見せになりました。釘が刺された手、槍が刺された脇腹です。「コロ 1:20 その十字架の血によって平和をもたらし、御子によって、御子のために万物を和解させること、すなわち、地にあるものも天にあるものも、御子によって和解させることを良しとくださったからです。」この方が血を流してくださいました。私たちの心が罪によって神との調和がなくなっただけでなく、被造物全体が、万物が人の罪によって神との調和をなくしました。しかし、主が血を流してくださいましたことにより、まず私たちの罪が赦され、贖われます。そして万物も贖われ、調和を取り戻します。

そして、再び、「平安があなたがたにあるように」と言われます。ここでは、これからイエス様が弟子たちを福音を宣べ伝えるように遣わすための平和であります。世からの反対、迫害、いろいろな困難があります。キリスト者として生きることが、霊の戦いです。神との平和だけでなく、神ご自身の平和、その栄光にある平和です。イエス様が誕生した時に、御使いが羊飼いたちに現れ、「ルカ 2:14 いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和が、みこころにかなう人々にあるように。」と賛美しましたが、この平和です。神との調和の中にいるので、平安が心の中に支配します。「ピリ 4:6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」

なぜこのことをイエス様が強調されているかと言えば、彼らは、十字架にイエス様が付けられる前から、主が十字架につけられて、三日目によみがえったら、ガリラヤで会うと言われていたからです。よみがえられた主は、女たちに、ガリラヤで会うことを伝えなさいと言いつけられていました。ところが、彼らはその気配もなく、戸をしっかりと閉めたままでした。恐れが、彼らを出ていくのを阻んでいました。それで、主は、ガリラヤで会うと言われていたのですが、事実、ガリラヤでお会いになるために、初めにエルサレムで会われて、そして彼らを励まし、ガリラヤで会うように命じられています。ガリラヤこそ、弟子たちがイエス様の宣教を目の当たりにしていたところです。主に倣って、自分たちも主の御名によって力強い働きをこれからしていくのです。そのために、まずは平和が必要です。私たちも同じですね、人々のところに遣わされて、キリストを現し、証します。そこには恐れがともないます。しかし、だからこそ神の平和が私たちを支配するのです。

「父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」という言葉ですが、イエス様はヨハネの福音書で何度なく、「父がわたしを遣わされた」ことを強調していました。どのように遣わされたのでしょうか？「人々の間に住んだ」とヨハネ 1 章 14 節にあります。創造主であられる方が肉体を取られて、それで住まわれました。間もなく父なる神のところに戻りますが、地上における使命を、人々と共に生きることで果たされたのです。私たちは使徒の働きを見ていく時に、聖霊の力が臨むと、地の果てにまで、「わたしの証人となります(1:8)」とあります。証しをする、という言葉だけでなく、生きていることそのものが証言となるのです。イエス様が、共に住まわれることによって、父なる神が示されたように、私たちが遣わされているところで共に生きることによって、私たちを通して、キリストが現れるのです。

²² こう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」

聖書において、人がどのように造られたかが書かれています。「創 2:7 神である【主】は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」ヘブル語では、息も、霊も、同じ言葉が使われています。主がここで息を吹きかけるというギリシア語は、七十人訳という、ヘブル語聖書のギリシア語訳における、創世記 2 章 7 節の言葉と同じです。つまり、主がなされているのは、まさに、神が息を吹きかけて、人は生きるものとなったということです。ここで弟子たちが新しく生まれたということです。神は罪を赦し、そしてご自分の聖なる霊を、イエスを信じる者に与えられるのです。これによって、新しく造られ、神の子どもになります。

そして、これは使徒の働き 1 章にある、「聖霊のバプテスマの約束」とは違います。聖霊のバプテスマは、あくまでも証しのための力です。こちらでは、新しく聖霊が心において生きることです。上から生まれることです。神の子どもになることです。ですから、イエス様は、養子縁組として子供とされた彼らを、「わたしの兄弟」と呼ぶことができるようになりました。

²³ あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残ります。」

聖霊を受け、そしてイエス様が父なる神から権威が与えられたように、イエス様に遣わされる者たちも、その権威が与えられます。しかし、ここで大事なことは、イエス様が既に赦した人々を、そのまま「赦されました」と宣言することです。教会は、聖書にある権威、イエス様にある権威をもって赦されました！と宣言できるのです。主はペテロに、御国の鍵を与えられたと言われましたが、天に入るも、拒まれるも、福音にある権威にゆだねられているのです。

2A 見ないで信じる 24-29

²⁴ 十二弟子の一人で、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。

²⁵ そこで、ほかの弟子たちは彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言った。

トマスですが、彼はこれまでも、ちょっと他の弟子たちとは違う、という感じのある人でしたね。ラザロが死んだので、ベタニアに行くといエス様が言われた時に、「11:16 私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」と言いました。ユダヤにいて、イエス様は命が狙われていて、それでそこから退避していたからです。みなは、ラザロが死んだということに衝撃を受けていたと思いますが、トマスは、ユダヤ人に殺されるということなのだ分かった、殉教しようと言っていたのです。そして、最後の晩餐の時に、主が、「14:4 わたしがどこに行くか、その道をあなたがたは知っています。」と言われたのですが、おそらく弟子たちは誰もが思っていた疑問だと思うのですが、トマスは、そのまま口に出しました。「14:5 主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。」ここでは、ちょうどよい時に、トマスだけがいなかったということで、何かちょっと他の弟子と空気が合っていない、感じがしますね。けれども、トマスをもって、ある意味、弟子たちの信仰がついに、イエス様への全き信頼ということで落ち着きます。

トマスは、これまでと同じく、その場の雰囲気に関心を合せていません。実証できなければ信じることはできないとしています。このことが、かえって私たち読者に大きな確信を与えることとなります。よみがえられたイエス様には、手に釘の跡があり、そして、槍の刺された脇腹の跡がある、ということです。肉体を持っている、しかも、十字架による傷跡が残っているということです。

²⁶ 八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。

「八日後」ということです。週の初めの日から八日後ですが、三日後と同じ表現で、その当日も含めます。ですので、再び日曜日、週の初めの日と考えられます。これは意味深です。トマスがそこにいなかったのが、新たな始まりが、二度目に与えられたと言えます。前回と同じように、「戸には鍵がかけられていた」とあります。しかし、「イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち」とあります。つまり、物理的な障壁を、新たな復活の体にとっては障壁がないということです。けれども、その体に傷跡があり、幽霊ではなく、肉体をもっているということです。主は、「平安があなたがたにあるように」と言われました。主が再び現れたのは、トマスのためだけでなく、他の弟子たちのためでもあったと言えるでしょう。ユダヤ人をまだ恐れていたのでしょう。

²⁷ それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

ここから分かることは、イエス様は、トマスが八日前にこの部屋にいた時に、実は目に見えないけれども、そこにおられたということです。「その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」という言葉を主は、その場で聞いておられたのです。私たちは、主はおられるけれども、目に見えないだけということを知らないといけません。私たちの真ん中にイエス様はおられますが、今は聖霊によっておられます。ただ、目に見えないだけです。

そして、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」愛に見ています。忍耐をされています、トマスが信じないので、その信仰を助け、信じることができるように励ましておられます。

²⁸トマスはイエスに答えた。「私の主、私の神よ。」

これは、ヨハネによる福音書の大きなテーマであります。イエスが、主であり、また神ご自身でられること、これを疑い深いトマスの口からの告白がありました。ここに来るまでも、弟子たちはイエス様を信じていました。「信じた」という言葉があります。けれども、その信仰というのは、生き物のようなもので、あるいは子供の成長のようなもので、初めはなんとなくのもの、薄いものだったものが、次第に、主の栄光を見ることによって育てられていきます。そして子の栄光が現れました。手に釘の跡、脇腹の槍の刺した後がある復活の姿を見ることによって、主は、私たちの罪のために死なれ、私たちを義とみなし、いのちを与えるために甦られたことが明らかにされたのです。

これをもって、弟子たちが、イエスが神の御子キリストであることの全き信仰に達したと言ってよいでしょう。一回性ものではなく、何度も何度も主はご自分の栄光を見せて、彼らを育てられたのです。私たちも、育てられています。「エペ 4:13 私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。」時にトマスのように、後れを取る人がいるかもしれませんが、しかし、信仰と知識において一つになり、成熟した大人となるのです。

このように、信じることにおける一致もありますが、イエス様はご自分の民のために来られました。が、受け入れなかったという言葉が 1 章にありました。ユダヤ人の指導者がいて、彼らが多くの印を見ても信じないために、信じられなくなり、そして殺意を抱き、それを実行に移しました。こうやって不信仰のほう、その暗闇も明らかにされました。

もう一つ大事なことは、トマスのこの言葉、イエス様を主として神としてあがめることばを、否定されなかったことです。彼の礼拝を受けられたということです。生まれつきの盲人も、イエス様が神の御子であることを知って、「主よ、信じます。」と言って、礼拝しています(9:39)。イエス様への信仰の一致は、礼拝へと向かわしめます。

²⁹ イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」

イエス様は、トマスや他の使徒たちとは違い、主が天に昇られた後に、聖霊によってご自身を信じる者たちを励ますために、この言葉を語られたのでしょう。トマスたちは、イエス様を見て信じました。けれども、見ないで信じるのが幸いです。先にヨハネが、墓まで行って、そこに亜麻布があった、それを見て信じましたが、ヨハネは、自分自身が、聖書の言葉を理解していなかったことを告白しています。ペテロも後に、第二の手紙で、自分は主の栄光の目撃者だが、「2:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。」と告白しました。見て、信じることもあるが、見ないで信じること、主がみことばでそう語られたから、という理由だけで信じること、これが幸いだと言うのです。

3A 永遠のいのち 30-31

³⁰ イエスは弟子たちの前で、ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていない。³¹ これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。

ヨハネは、手紙においても、黙示録においても、自分の書き記している目的を明確にしています。何のための書いたのか？ イエス様は、多くのしるしを行われました。共観福音書には、もっと多くの奇跡が記されています。けれども、ヨハネは敢えて七つの奇跡に留めました。とても、短く、端的にまとめたのです。目的は第一に、「イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため」です。第二に、「信じて、イエスの名によっていのちを得るため」です。この二つの目的のために、福音書を書き記しました。

これは、主のみこころと言えるでしょう。他にいろいろなことが語られても、いろいろなことが起こっても、神のみこころは、ここに集約されています。イエスを神の子キリストと信じること、そして、イエスの御名によって、永遠のいのちを得ることです。